

# チームワークで 支える 電力の 安定供給 最前線

電力会社とお客さまを  
直接つなぐ架け橋

発電所で作られた電気は、送電中のロスを少なくするために50万、27万5000ボルトという超高压で送電される。その後、幾つかの変電所で徐々に電圧を下げ、配電用変電所で6600ボルトまで下げられる。6600ボルトの電気は、お客さまにとって最も身近な設備である電柱の上の電線で送電されている。そこからさらに、電柱の上にある「バケツ」のような形をした変圧器で2000ボルト、100ボルトに変圧し、電柱と住宅をつなぐ引込線を通じて、ご家庭の

## 【松阪営業所 配電運営課】

現場に向く前、川添班長を中心にミーティングを行う配電運営課スタッフ(右端・川添班長/中央・岡健太)。松阪営業所がある三重県松阪市は人口約17万人。東部は伊勢湾に面した平野で、西部は奈良との県境に紀伊山地が連なる。気候は温暖だが、台風の被害が多く配電設備の復旧作業に追われる。



お客さまに電気をお届けしている。引込線は、通信でいう「ラストワンマイル」に相当する。

電力会社とお客さまをつなぐ最前線で電柱や変圧器、電線の設計やメンテナンスを担っているのが配電部門である。配電部門は、電柱や電線など設備のメンテナンスや復旧を行う配電運営課と、新しい設備の計画や設計を担当する配電建設課に分かれている。

松阪営業所配電運営課に勤務する川添靖班長と岡健太は、三重県松阪市を中心とするエリアを担当している。同営業所のエリアは三重支店の中で最も広く、配電線の総延長は

7000キロメートルを超える。

その膨大な長さの配電線をメンテナンス、点検し、台風などで停電した際にも現場にいち早く駆けつけて、迅速な復旧作業にあたる。

川添は「暮らしに欠かせない電力の安定供給を使命にしている電力会社にとって、配電部門は最後の砦」と自負する。

岡も「お客さまに最も近い所で、視線を受けながら仕事をしているわれわれは、中部電力の顔だけに、いい意味でプレッシャーを感じる。常にお客さまの目線で考えて、迅速かつ丁寧な業務の遂行を心がけています」という。



—デンキをつなぐ  
現場の底力 No. 3

引越し、台風、鳥対策…  
シーズン通してフル稼働

営業所には、地域のお客さまから、引越しによる電気の使用開始や停止の連絡をはじめ、「建設工事でクレーンを使うので現場の近くの電線にカバーを付けてほしい」など、電気をお使いいただく上での多種多様な依頼が寄せられる。

生活を支える業務だけに、万が一の停電に備え、24時間現場に向くことができる体制を整えている。配電線の巡視業務と並行して、「予定表はいつもびつしり(川添)と言う。さらに気を休めることができないのが、台風の襲来時期だ。毎年、暴風雨で木が倒れて電線が切れるなど配電設備が損傷し、停電が発生する。そのため台風が近づくと、配電運営課は数組に分かれ、夜間も営業所



川添 靖(かわぞえ・やすし)  
中部電力松阪営業所 配電運営課班長。1981年入社。配電線の保守技術を習得し、四日市、鶴方、伊勢などの営業所を経て、2009年から松阪営業所。現在は、後進の指導にも尽力。モットーは「何事にも全力で向かう」。

や被害に遭いそうな地域で待機して災害に備える。近隣の営業所の応援に駆け付けることもある。大型台風の場合には被害が大きく、通過後3、4日たつても「傾いた樹木で電線が切れそう」といった対応に追われる。2月末から5月上旬は営巣対策に奔走する。繁殖期を迎えたカラスは、小枝を集めて樹上に巣を作るが、電

柱に営巣することも多い。糞害だけでなく、巣の材料に混じった針金や電線をショートさせる恐れがあるので、撤去しなければならぬ。  
**技術とチームワークで  
停電範囲を最小限に**

川添が日々心がけているのは、安全と技術の継承とチームワークだ。

岡は入社5年目の昨年から川添のもとで技術の向上に励んでいる。班長の指導のもと、2年目の今年、岡は社内「仮復旧技術作業者中級」の技術力認定の取得を目指している。川添は新入社員のころ、先輩から配電作業の技術を叩き込まれた。当時の先輩たちは職人気質で、頭ごなしの教え方に疑問を感じた川添は、

若手に対してまず意見を聞いたうえで助言するという指導法を実践している。

「安全は最優先事項」と肝に銘じる川添は、現場ではささいなミスでも絶対に許さない。電柱での作業中に、小さな部材でも落とすものなら厳しく叱る。

こうしたベテランの薫陶を受けた岡も「最初は、怖い人という印象だったが、まったく違い、常に私たちのことを考えてくれている。班長から

もっと多くのことを学んで技術力を身につけたい」という。

中部電力は、電力を安定供給するため、あらゆる分野で新しい技術の導入を推進している。松阪営業所には、配電線の主要な個所で遮断・通電を遠隔操作することにより、停電の範囲を縮小できる配電線自動化システムがある。

川添は「自動化システムだけでは、どうしてもキメ細かい対応はできない。私たちが現場に向いて対応すれば、数百戸の停電範囲を数十戸の最小限のエリアにまで狭めることができる。自動化システムは、現場の人間との連携で、より効果を発揮する」と語る。

台風で停電した地域に駆け付けて復旧作業を行い、明かりがついた時、「ありがとう。電気のありがたみがわかった」と感謝の言葉をかけられる。言われるたびに、川添は「配電という仕事が必要とされている。本当に続けてきてよかったと感じる。チームワークが確保できないと、安全作業は確保できない。同僚がそれぞれの復旧現場から無事に職場に戻り、みんなの顔がそろったとき、仕事をやり遂げたと安堵する」という。

文・重信秀年(フリーライター)  
撮影・下坂敦俊